

HPV（ヒトパピローウイルス）感染症

予防接種の説明

【 HPVと子宮頸がん 】

子宮頸がんは子宮の頸部（子宮の出口に近い部分）にできるがんで、若い世代の女性のがんの中で多くを占めるがんです。日本で子宮頸がんになる人は年間約11,000人、約2,900人の女性が亡くなっています。

子宮頸がんの主な原因は、HPV（ヒトパピローウイルス）の感染とされています。HPVには200種類以上のタイプがあり、子宮頸がんの原因となるタイプが少なくとも15種類あることがわかっています。

HPV感染は、主に性的接触によって起こります。一生のうち何度も起こりえます。感染しても自然に消えますが、一部の人で数年～十数年かけて、前がん病変（がんに移行する前段階の病変）を経て子宮頸がんを発症します。

積極的な勧奨を差し控えている期間に定期接種の対象であった方の接種機会を確保するため、令和7年3月31日までキャッチアップ接種を行っています。

〜〜 接種履歴等は、母子健康手帳等でご確認ください。〜〜

【 ワクチンの種類と接種スケジュール 】

- 定期接種対象者：小学6年生～高校1年生相当までの女子
- キャッチアップ接種対象者：平成9年度生まれ～平成19年度生まれの女性（令和7年3月31日まで接種可）

ワクチン名	対象となる HPV のタイプ		標準接種スケジュールと接種回数
	主に 子宮頸がんの原因	主に 尖圭コンジローマの原因	
2価 (サーバリックス)	16・18型		初回を0月として、以降1か月後、6か月後の計3回
4価 (ガーダシル)	16・18型	6・11型	初回を0月として、以降2か月後、6か月後の計3回
9価 (シルガード9)	16・18・ 31・33・	6・11型	【15歳になるまでに接種を開始する場合】 初回を0月として、以降6か月後の計2回
	45・52・58型		【15歳になってから接種を開始する場合】 初回を0月として、以降2か月後、6か月後の計3回

※ 原則として、同じ種類のワクチンを接種します。

※ 医師と相談のうえ、2価又は4価で1回又は2回接種した方が、残りの接種を9価に変更することも可能です。

【 ワクチンの効果 】

HPVには多くのタイプがあり、子宮頸がんの原因の50%～70%はHPV16、18型による感染です。シルガード9は、HPV16、18型に31、33、45、52、58型を加え、子宮頸がんの原因の80～90%を防ぎます。

また、HPV未感染者を対象とした海外の報告では、感染及び前がん病変の予防効果に関して、いずれのワクチンも高い有効性が示されており、初回性交渉前の年齢層に接種することが、各国で推奨されています。

【 ワクチン接種後の副反応 】

HPVワクチン接種後には、多くの方に、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがあります。まれですが、重い症状（重いアレルギー症状：呼吸困難やじんましん等（アナフィラキシー）、神経系の症状：手足の力が入りにくい（ギラン・バレー症候群）、頭痛・嘔吐・意識低下・急性散在性脳脊髄炎（ADEM）等）が起こることがあります。ワクチンとの関係が不明なものも含めて、HPVワクチンで重篤な副反応を起こす確率は0.05%程度と報告されています。

痛みや緊張等によって、接種直後に一時的に失神や立ちくらみ等が生じることがあります。失神による転倒を避けるため、接種後30分程度は体重を預けることのできる背もたれのあるソファに座るなどして様子を見るようにしてください。

【 その他 】

ワクチン接種歴にかかわらず、子宮頸がんを早期発見するため、20歳以降は定期的に子宮頸がん検診を受けることが重要です。

《 HPVワクチンに関する情報 》

